解題

戒田 栄

- 1 名称 松山藩士長屋家文書
- 2 旧蔵者 長屋恒満（松山市出湊町二丁目）
- 3 文書の伝来 本文書は昭和 32 年長屋恒満氏より当図書館に寄贈されたものである。
長屋家の歴代略系図について

本系図については、「年回操出帳」、「長屋丈左衛門分下地直書入」などによれば次のとおりである。

満嘉（天和 3 年没）－①満武（宝暦元年没 71 歳）－②満教（安永 5 年没 58 歳）－③満剛（寛政 11 年没 55 歳）－④満謹（弘化元年没 61 歳）－⑤満明（慶応 3 年没 55 歳）－⑥忠満（明治 33 年没）－⑦恒満にいたる。

4 文書の配列と概要

本文書は松山藩における下級士族長屋家に関係する古文書、記録類である。その数約 600 点はほとんどが一枚文書であり、冊子型の史料は僅少である。本文書は当家歴代の役職任免の書付、祐筆としての諸記録、私的文書などで年代不詳のものが多く、各世代毎に一括して保存していたのでそれに従って配列した。

初代満武 天和元（1681）年－宝暦元（1751）年

満武の実父満嘉の事蹟は明らかでなく、全く史料に見ることができない。満武は養父に育てられ、正徳 3 年に御持筒に召し抱えられ、7 石 2 人扶持を下さる。同 5 年宗門方書役、寺社奉行書役を歴任し、「住職、神官の相続に関する多くの記録」を残し、享保 9 年に越智郡手代となり、のち番入仰せ付けられる。

2 代満教 享保 4（1719）年－安永 5（1776）年

元文 3 年周布郡手代に召し抱えられ、6 石 5 斗、2 人扶持を給せられ、その間、しばしば参勤交代の御供仰付けられ、在府中足米 30 俵 1 斗 4 升 9 合を給せられる。その後寛延 2 年御預所（幕領）手付を仰せ付けられ、銅山上役並として 10 石 3 人扶持を下し置かれ、宝暦 13 年 2 石加増、同年 12 月御預所具定村における西条藩との山論を収めた功により御称美を下さる。明和 4 年大小姓格仰せ付けられ、御預所手付被免。同 6 年郡方御用懸り仰せ付けられ 12 石 3 人扶持を給せられる。明和年中における「町方之者共并寺院にまで御祝儀能拝覧仰付の書付」、「能番組」、「神輿渡御」、「秋季祭礼についての申渡覚」など、庶民生活の一端を表現している。

3 代満剛 延享 2（1745）年－寛政 11（1799）年

祐筆として天明 4 年より寛政 9 年にいたる 14 年間の執務記録抄一巻を残し、また天明元年藩主定国の初入国につき、「御代替に付社人町人等御礼言上之覚」、「城主初而国入に付諸注意書」などが残存している。

4 代満謹 天明 4（1784）年－弘化元（1844）年

加茂弥平次二男虎次郎にして満剛の賀養子として二女に配せられた。文政年中、御家譜年譜書継御用掛、御留守居番書簡役などを歴任し、天保年中参勤交代により江戸在番に付米5石御足米を下し置かれた。その後、御祐筆勤役。その間藩主定通が藩祖定勝の神霊を招請して東雲神社を造営したが、その記録が「御城御山内東雲神社日記一卷」（文政6年9月18日より同年12月10日まで、以下欠）にして、12月4日に仮宮の上棟式を挙行了した。

5代満明 文化10（1813）年－慶応3（1868）年

幕末に御祐筆役、御進物番、御供番、大小姓御番目付などを歴任し、大小姓格を仰せ付けられた。嘉永6年大名目付より「異国船渡来に付大名屋敷警備」の達示、また「異国船退帆後の心得覚」を江戸上屋敷大書院において菅中務より仰せ渡された。さらに当藩の長州征伐に際して「慶応2年の軍事組織、海岸警備、軍事心得の書付」、「慶応年間における家中老婦女子等立除之心得」の諸記録が残存している。

6代忠満 明治33年没。

先代満明の長男熊之助は病弱のため廃嫡され、明治3年32歳で没した。次男左右馬が嫡子仰せ付けられ、忠満と改名し、大小姓雇となる。次代恒満にいたる。